35 鑷子カウントの自動化

西川悦子, 山脇範子 (鳥取大病院材料部), 藤井 昭 (鳥取大病院手術部)

〔目的/背景〕 当材料部では、総数約7,500本の鑷子をベースに、手術部を除く各病棟・外来に定数配置し、各部署から返還された本数分を補充供給している。1日に返還される本数は部署によっては500本におよび、全体で1週間平均4,253本にのぼる。これを1本ずつカウントすることは、単純で煩雑な作業で、カウントミスも多く、問題となっている。

そこで、ヒューマンエラーを最小限にし、省力化を図るために、精密重量測定器による鑷子カウントの自動化を検討することにした。

〔実験方法〕 鑷子カウントを従来の用手的カウントと精密重量測定器 (エー・アンド・デイ社カウンティングスケール) を用いた自動カウントで行い、所要時間と誤差を比較した。

1回のカウントは100本単位とし、それぞれ50回行った。

〔結果〕

1) カウント所要時間

用手法 108 ± 16 秒 (72~140秒), 自動法 18 ± 4

秒 (13~37秒)

2) カウントの結果 (誤差)

用手法 100 ± 3.0 本 (90~110本), 正解率 70%

自動法 100 ± 0.9 本 (98~102本), 正解率 53%

〔考察〕 自動カウントの場合、カウント所要時間は平均18秒で、用手的カウントの1/6であった。

カウント誤差に関しては、用手法は正解率は比較的高かったが、不正解の場合の誤差が大きく、最大10本に達した。自動法の場合、正解率は約半分であるが、誤差が比較的小さかった。当院では、現在のところ、4種類の鑷子を使用しており、鑷子1本当たりの重量の設定に難しさが残っている。

〔結論〕 当材料部では、1週間平均4,253本の鑷子を平均85回に分けてカウントしている。これに要する時間は1.28時間である。これを自動化した場合、0.21時間で済むことになり、1週間当たり約1時間の時間的節約につながることがわかった。誤差を縮小するために、鑷子の規格を統一することが課題として残った。

36 イギリスにおける注射薬混注業務の外部委託

串田 一 樹 (昭和薬科大)

わが国の医療は、急速な高齢社会の到来により、医療保険財政が深刻な赤字財政に陥り、その再建が急務となっている。そのため、医療法や診療報酬などの制度面から見直しが進められているところである。一方、最近では従来から続いてきた医療に対する意識と異なり、患者だけではなく医療提供者も医療はサービス業であると考えようになってきた。

医療サービスは、一般のサービス業の評価と同じように、主に治療の結果、経済性、および患者のQOLの視点から評価される。特に、最近では、国民に対して公平・公正に医療を提供するだけでなく、質の高い医療サービスをより安く提供することが求められるようになった。そのため、医療分野においても、規制

緩和、業務委託や第三者評価などが行われるようになってきた。

このような状況の中で、薬剤供給についても質の高いサービスが求められている。特に、注射薬の供給は、無菌的な環境で調剤を行い、さらに調剤を行う薬剤師にも注射薬の高い混注技術が要求される。しかし、注射薬の混注業務は、未だにナースステーションで看護婦が行っている施設もあり、適正な薬剤供給を行う上から改善が求められている。

今回、注射薬の混注業務の外部委託や病院薬剤部の業務委託について、イギリスの施設を見学する機会が得られたので報告する。